

フェリス女学院150年の歩みと未来への「ミッション」 ——女性の使命感がつくり出すもの——

キスト岡崎さゆ里

はじめに

このたび「フェリス女学院150年の歩みと未来へのミッション：女性の使命感がつくり出すもの」という題で講演をさせていただいております¹。私自身は残念ながらフェリス女学院の卒業者ではなく、その教育の恩恵を受けた証をすることは出来ません。その代わりに、私は創立者のキダー女史と同じくアメリカ改革派教会から派遣されている宣教師の立場から、フェリス女学院の歩みと功績を内部からの研究ではなく、外部からつまり宣教師を派遣し、ミッション・スクールを通して宣教活動をした主体と言えるアメリカの教会側からの、フェリス女学院創立の意義を皆様と分かち合いたく思います。150年前にフェリス女学院が一人の女性によって創立されたことが、皆さんの思いもよらぬところで非常に重要性を持っているのです。そしてそれがフェリス女学院のアイデンティティとビジョンに一層の豊かさを加えることを願っております。

キリスト教会における女性の賜物と働き ルカによる福音書7：36～8：3

初めに、ルカによる福音書の中のある物語を通してイエス・キリストの周りで起きた女性に関する問題を見ていきたいと思えます。この箇所には新共同訳聖書で「罪深い女を赦す」と小見出しがついていますが、イエス・キリストがいわゆる「罪深い女」に向かって赦しの宣言をしたエピソードです。ここに登場するシモンという名の男性は、自分たちの行いが神の律法に即して正しいとみなしているファリサイ派です。ファリサイ派とは「分離派」という意味で、いわゆる正しくない人たちから自らを分離して生活していたほどであり、社会的には有力者ですから当時の状況の中では断罪者、勝ち組、強者です。それに対して、もう一人の登場人物である女性は「罪深い女」と呼ばれています。社会的には女性であること自体がすでに弱者である上に、なんらかの正しくない行いのゆえに罪人とみなされています。ファリサイ派シモンがイエスを主賓に招いて囲んでいる食事の席に彼女は闖入者として現れ、当然のことながら招かれざる客でした。

ここで、彼女がどんな罪を犯したかということは触れられておりません。にもかかわらず、伝統的にこの人が遊女であった、売春婦であったようだと解釈されることが多いのです。それは何故でしょうか。女だからではないか。男性の罪人であればどうでしょう、強盗とか、脱税しているとか、徴税人のよう

1 本稿は2016年10月27日にフェリス女学院大学緑園キャンパスで行われた「2016年度キリスト教研究所講演会」の講演内容をもとにまとめなおされたものである。

に権力を乱用したとか、頭を使った犯罪などもあり得るでしょう。しかし女性の場合は、犯す罪さえもがただ「女」であるという「性」の部分だけがデフォルメされた罪しか思いつかない、男性本位の女性観の表れによる先入観ではないかと思うのです。その上彼女が泣きながらイエスの足を髪の毛でぬぐう行為を見て、「よほど大きな罪を犯した」ためだとみなされ蔑まれました。

しかしイエス・キリストは、この女性の謝恩の行為は必ずしも罪自体の大きさによるのではなく、罪の「自覚」の大きさであるとし、借金を帳消しにしてもらった二人の人のたとえ話を通してファリサイ派のシモンに向けて論じます。大きな負債を赦されたと自覚していればこそ、その分赦してくれた相手つまりイエスに対して恩に着的感情、感謝の思いも大きく、愛をもって応答するのであると。

この女性が犯した罪が何であれ、彼女はそれまでは社会や周囲によって断罪されることで思い知らされてきました。しかしイエス・キリストとの交わりを通して、自分の罪を神の前で自ら告白することが出来るようになったのです。それによって神を対象にした謙遜さと、同時に神にとっていかに自分が大事な存在であるかという自己評価を得ることが出来るようになりました。その感激からイエスへの感謝と愛を行動に移したのです。

そしてこの女性の物語は8章に引き継がれます。2節に出てくるマグダラのマリアはこの女性ではないかと解釈されているからです。そうであるとする、かつて「罪深い女」と呼ばれた彼女はイエスとの出会いによって変えられ、その後はイエスの弟子たちや他の婦人たちと一緒に、イエス・キリストの福音宣教の働きに加えられたことになるのです。つまり、それまで社会的に弱者とされてきた女性が、小さくされてきたゆえにかえって人の評価や称賛を求めることなく、神の前での謙遜と自己評価を得てひたすら誠実にイエス・キリストに従う道を歩むことができたと言えます。

この物語は、キリスト教会における女性の賜物と働きについて重要な示唆を与えているように思います。

フェリス女学院創立の意義：宣教師派遣元アメリカの側から

フェリス女学院創立の功績をアメリカ側から見た場合、ことに女性の役割について非常に重要な二点を指摘することができると思います。一つは、フェリス女学院は当時のアメリカの教会婦人たちの使命感が結実した果実であるということ。もう一つは逆に、フェリス女学院が創られたことが、同じ女性たちに恵みをもたらしたということです。

1) RCA(Reformed Church in America) の成り立ち：教育を中心に

ここでしばらくフェリス女学院に宣教師を派遣したアメリカ改革派教会Reformed Church in America (RCA) の成り立ちと教育機関の設立についてお話いたします。アメリカ改革派教会は、1628年に当時ニューアムステルダムと呼ばれた東海岸のニューヨークに第一オランダ改革派教会として創始したアメリカで最も古いプロテスタント教団で、カルヴァン派の伝統的な神学を土台とするメインライン・チャーチです。ニュージャージーに1766年に教派の大学としてラトガース男子校が建てられ(後に共学校)、明治期には勝海舟の息子など多くの日本人が留学したことでも知られています。その後ニューブランズウィック神学大学院が創立(1784年)、これはアメリカで現存する神学校では一番古いものとなります。

このように元々はニューヨーク、ニュージャージーなどの東海岸で盛んでしたが、19世紀中盤にオランダでの宗教的迫害から逃れてアメリカ中西部に新しい移民の波が押し寄せてきました。彼らは五大湖周辺の、ミシガン、アイオワ、ウィスコンシン、ミネソタ、などに移り住み、主に農場地帯のRCA教会が増え力を持つようになりました。今はヘッドクォーターもニューヨークからミシガンに移り、ホーランド市にはフェリス女学院大学と親交を結ぶホープカレッジがあります（1851年創立）。ここでも明治期に木村熊二や大儀見元一郎が学び、キリスト教信仰に出会って先述のニューブランズウィック神学校で牧師となって帰国しました。1861年にはホープカレッジ卒業生の願いで後にウェスタン神学大学院が創立されましたが、私は先にこのウェスタンを卒業してから結婚してニューヨークに移り、牧師の学位をニューブランズウィックで取得しました。現在のRCA教会員数は約22万人と、日本キリスト教団とあまり変わりません。さて、RCAの成り立ちは以上のようなのですが、次に19世紀アメリカにおける世界宣教がどのように創始されていったかをお話しします。

2) 米国教会およびRCAの世界宣教開始

1810年 アメリカン・ボード American Board of Commissioners for Foreign Missions設立

1812年 婦人一致海外伝道協会 Women's Union Missionary Society設立

1857年 オランダ改革派教会（RCA）独自の世界宣教局設置

1859～61年 日本にブラウン牧師、シモンズ医師、フルベッキ牧師、バラ牧師が派遣される

1869年 メアリー・キダー女史来日

1875年 RCA婦人世界宣教局 The Women's Board of Foreign Missions of the RCAが成立（～1946）

「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなた方に命じておいたことをすべて守るように教えなさい。（マタイによる福音書28:19-20a）」

アメリカでは1810年に「アメリカン・ボード」で知られるAmerican Board of Commissioners for Foreign Missionsという最初の世界宣教局が成立しました。当時キリスト教界での大覚醒運動が起こり、イエス・キリストの大宣教命令「すべての民をわたしの弟子にしてください」に応えて世界への宣教のため会衆派、長老派、改革派が教派を超えた協力で設立しました。

その後1857年、RCAの前身であるオランダ改革派教会独自の世界宣教局が設立され、開国したばかりの日本へ1859年にブラウンBrown牧師、シモンズSimmons医師（～60）、フルベッキVerbeck牧師そして1861年にバラBallagh牧師が宣教師として派遣されました。

3) 米国女性の宣教参与

しかし実は、婦人一致海外伝道協会Woman's Union Missionary Societyの設立は1812年、つまりアメリカン・ボードが世界宣教のビジョンを与えられてすぐ後に、女性もまた女性だけの力でイエス・キリストの言葉に従い世界宣教を行動に移したのです。女性のほとんどは自分の収入を持つことが出来なかった時代に、自分たちだけで活動資金を作れたとは考えられないことです。しかし、彼女らは夫の給料から預かった生活費をやりくりして「海外伝道のために週に1セントを」献金しようという小銭献金

の呼びかけに（リーストコイン）全国各地の女性が応えたのです。また、人材に関してもそうです。思いからなんとか女性の教会指導者を送りたかったことでしょう。けれども当時女性がいかなる形でも教会のリーダーシップをとることは不可能でした。これについては後でまた述べます。

しかし当時の女性たちにも、教育に携わる職業を持つ者がいました。人を育てる仕事です。能力と生活力があり、なおかつ当然のことながら世界の辺境までも赴く勇気と福音伝道の熱を持った女性信徒が十分におり、同じ女性たちの応援を得て信徒宣教師として海外へと派遣されていったのです。

しかしそこまでのモチベーションは何だったのでしょうか？自分に経済力も無いのに、見も知らぬ土地の見知らぬ外国人の魂の救いのためにあくせく苦勞して献金をし、自分ではかなわない宣教の働きを別の女性に託すとは。まさに当時の女性は男性に比べて「小さくされた者」だったからです。それも世俗社会の状況だけでなく、教会の中で小さくされた存在でした。必ずしも数が少なかったわけではありません。教会員の三分の二が女性なのです。しかし教会内では、牧師職はおろか役員にもなれず、運営や礼拝、教育に関わる責任はすべて男性のものとしてされていました。つまりそのようなリーダーシップ・ポジションは男性に占有されており、一般社会の女性差別と同様な現象が教会内でもパウロの手紙を根拠にまかり通っていました²。女性は教会においては沈黙が美徳とされており、女性たちの福音伝道の業に加わりたい、という熱は教会の中では用いられるチャンスはなかったのです。

そこで女性たちの目は、自ずと教会の外へと向いていきました。イエス・キリストの福音がまだもたらされていない地がこの世界にはある、そこに福音を述べ伝える、御言葉と愛の奉仕に関わることが出来る。その可能性が希望となり、そして同じように世界のどこかで社会において小さくされている婦人や子どもたちに、男性の指導者によってではなく女性自身の手で伝道するという使命感が与えられたのです³。

創立以来、1900年までに婦人だけの伝道協会がアメリカに41、カナダに7つ誕生していました。オランダ改革派教会も、キダー女史を送り出した2年後の1871年から女性宣教師を婦人伝道協会に依頼するようになりました。宣教局に自力で宣教師を派遣する献金の調達が難しくなってしまったからです。

ところが逆に、RCA内でも女性世界宣教局The Women's Board of Foreign Missions (WBFM) of the RCAが立ち上げられました。女性宣教局は1875年から1900年の最初の25年間で、現在の額にするとなんと20億円近い資金を集めて女性宣教師や彼女らの建てた女子学校、女子神学校を支えたのです⁴。

2 「ここであなたがたに知っておいてほしいのは、すべての男の頭はキリスト、女の頭は男、そしてキリストの頭は神であるということです。（中略）しかし、女は男の栄光を映す者です。というのは、男が女から出てきたのではなく、女が男から出てきたのだし、男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのだからです。」（コリントの信徒への手紙一11：3-9）

「婦人たちは、教会では黙っていなさい。婦人たちには語る事が許されていません。律法も言っているように、婦人たちは従う者でありなさい。何か知りたいことがあったら、家で自分の夫に聞きなさい。婦人にとって教会の中で発言するのは、恥すべきことです。」（同14：34-35）

3 「『婦人や子供の伝道は婦人の手で』、というあの熱意が、祈りとともにアメリカ各地からの献金となって背後から支えていたのである」山本菊子編著『豊かな恵みへ：女性教職の歴史』（日本基督教団出版局、1995年）、p. 23。

4 *Women in the RCA* <https://www.rca.org/women/women-rca>

4) キダー女史派遣の意義

フェリス女学院の創立者であるメアリー・キダーMary Kidder女史はそのような社会環境及び教会環境の中に置かれた女性でした。1834年、信仰深いピューリタンの家系の農家に生まれ、長じてからは単身故郷を離れて様々な学校で教鞭をとりました。ニューヨークのブルックリンで教師として自活していたこと自体、当時としては卓越した意識と実行力を持った女性です⁵。バラやブラウンらの推薦により、1869年に当時の世界宣教局長アイザック・フェリスの面接を受けて、宣教師として来日しました。キダー女史は、アメリカから初めて日本に派遣された女性単身宣教師です⁶。しかも婦人伝道局ではなくアメリカ改革派教会から任命されたのでした。これは他の女性宣教師と違うキダー女史にユニークな点であり、アメリカ改革派教会にとって非常に重要な意味を持つこととなります。

キダー女史は宣教師として来日した当初はブラウン牧師のアシスタントとしていわゆる準宣教師でしたがそのうちに自身の立場で働き始めました。1870年に数人の生徒をもって日本におけるキリスト教女子教育の最初のものとなるフェリス・セミナリーの教育を開始し、その後の活躍はフェリス女学院でも十分に研究されております。同じ宣教師の立場として非常に興味深く思えることは、1873年にキダー女史が結婚したエドウィン・ミラー宣教師が、1875年に自身の所属する派遣元の長老派から改革派に籍を移して妻のフェリスでの働きを支えたことです⁷。夫婦間であっても女性の地位が低い当時において、夫が妻の働きに参与することになったのはミラー自身が同じ宣教師としてキダー女史の事業に伝道の実りと夢を見たからでしょう。

フェリス女学院でのキダー女史の働きは、RCAにおいても重要な意義を残しました。長く扉が閉ざされていた女性の按手への大きな一助となったのです。これが、RCA側にとってのフェリス女学院の創立の意義の一つと言えます。

5) RCA女性按手への長い道のり：キダー女史の貢献

General Synod(年度総会) 決議経過⁸

1955年 神学調査委員会に「牧会における女性の役割と権威 The role and authority of women in ministry」についての調査が依頼される。委員構成は全員男性。

1958年 調査結果を審議。結論は否定的。

1972年 女性の長老按手の事実を総会で認知。

1979年 女性の牧師按手の事実を総会で認知。

1980年 「女性按手についての良心条項」を教会教規 (Book of Church Order) に加えることを決議。

1988年 「牧会における女性の役割と権威」神学的調査再依頼。総会への報告にメアリー・キダーの功績が根拠として特筆されている。

5 横浜プロテスタント史研究会編『横浜開港と宣教師たち：伝道とミッション・スクール』VI章M.E.キダー参照。

6 当時、宣教師に同伴の妻たちは「宣教師」に任命されておらず、準宣教師とみなされていた。Gordon D. Laman, *Pioneers to Partners: The Reformed Church in America and Christian Mission with the Japanese* (Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing, 2012), p. 100.

7 Laman, *Pioneers to Partners*, p. 103.

8 *General Synod statements: Women in Ministry* <https://www.rca.org/womeninministry>

2012年 「良心条項」の廃止を総会で決議（賛143/否69）。

2013年 「良心条項」の廃止を各地中会で決議（賛31/否14）。

RCAの女性按手に関する総会での決議経過を見ていくと、その道が非常に険しかったことが明らかです。1955年の総会において初めて「牧会における女性の役割と権威 The role and authority of women in ministry」について神学的妥当性を調査することが決議され、神学研究委員会に委託しました。調査結果は、聖書において女性と男性が神の前で平等であるとしつつもなお、イエスが十二弟子に男性を選んだことや執事の役割も男性が担ったことなどを根拠に、教会において女性を男性と同じように執事、長老、牧師に任職させるという実践を示唆するには至りませんでした⁹。しかし1972年に地方中会において女性の執事及び長老が任職した事実を総会は違反とせず認知し、これに続いて1979年の総会では前年に女性が牧師按手を受けたケースを不問に付しました¹⁰。

しかし多くの教会は女性の牧師按手が実際に行われたことに対して、今後自分自身の教会までその波が押し寄せることを懸念しました。そこで1980年のRCA総会は、教団全体に対する不信感が起きることを恐れRCAが分裂しないための妥協案として、女性按手に参加することを「信仰と聖書に基づいた良心に即して反対または拒否することができる」良心条項を決議し採択しました¹¹。ある教会が聖書的でないという理由で執事や長老に女性を選ばないと決めることが出来る、また牧師の招聘条件の中で女性教職を拒否することも尊重されることになったのです。これはすなわち、この件に関してはRCAの長老派組織には例外的な各個教会主義をとったということです。しかし同時に他の教会において中会と按手候補者（女性）の双方の合意が得られている場合は、これを妨害してはならないとも記されています。これは逆に言えば、女性按手に反対する権利が守られたことにより、女性按手を実行する教会の自由が守られることでした。

そのように、全体的には女性按手を積極的に認める方向に向かっていたのは確かです。1988年の総会では、再び「牧会における女性の役割と権威 The role and authority of women in ministry」の調査が

9 *Reports of the Committee on the Ordination of Women to the General Synods of 1957 and 1958* <http://images.rca.org/docs/archives/womenordinationreport.pdf>

10 *The Role and Authority of Women in Ministry* <http://images.rca.org/docs/women/authoritywomen.pdf> p. 7.
“Since 1972 women in the RCA have been entering new roles as ordained deacons and elders, and since 1978, as ministers of the Word and Sacrament. Nevertheless sociological and practical difficulties, as well as tradition, still restrain the church on questions regarding the leadership of women in the church.” とはいえ、社会的及び実践的な困難さと伝統から、教会における女性のリーダーシップに関する疑問は残り続けた。

11 Amend Part II, Article 2, Section 7 (*Book of Church Order*, p. 24) by adding the following: If individual members of the classis find that their consciences, as illuminated by Scripture, would not permit them to participate in the licensure, ordination or installation of women as ministers of the Word, they shall not be required to participate in decisions or actions contrary to their consciences, but may not obstruct the classis in fulfilling its responsibility to arrange for the care, ordination, and installation of women candidates and ministers by means mutually agreed on by such women and the classis. 中会のメンバーが女性按手に反対の場合、それを拒否できる権利があり強制できない。しかし他教会で女性按手をする場合には中会が女性按手を遂行する義務を妨げることはできない。

委員会に依頼されました。その報告書には女性が牧会においてリーダーシップを発揮した例として女性宣教師の働きがあげられ、メアリー・キダーの名が記されています¹²。アメリカ国内では制限されている女性の牧会的働きが、100年以上も前に異国の地で派遣された女性宣教師たちによってすでに十分に活用されていたという確たる実績です。しかも特にキダー女史は、婦人伝道局ではなくRCAが単独で（夫の同伴者としてではなく）宣教師に任職した初めての女性でした。そして女史の宣教師としての働きの内容は、独自に展開した女子教育活動つまり精神と価値観を育てる仕事ですから、医療宣教師や看護宣教師以上に直接に伝道・牧会に関わる霊的なもの、教会的なものであるのは明らかです。このことがRCAにおける女性接手の正当性を主張する十分な根拠として提出されたことは非常に意義深いと思われれます。

ともあれ、この後RCA内で女性接手が実施されたケースが各個教会レベルで増えていきます。しかしながら、女性教職の場合十分な神学的訓練を受けたからといって男性同様に教会からの招きを受けられたわけではありません。「男性の来手が無い」勢力が弱い教会などが、女性牧師でも無牧よりもましという事情で招聘されることは少なくなく、各個教会の中での執事や長老職についても同様でした。しかしそれまで教会内で女性の力が用いられると言えば家事労働的な内容に限られていたのが、女性接手の実績が積まれるにつれて、性別に関係なく教会運営や教育における個人の賜物が認められるようになっていきました。そしてついに、2012年の総会において「良心条項」を撤廃する決議が行われ、翌2013年全国各地の中会でそれを受け入れる決議がなされたのです。それでも数字を見ると投票数の三分の一は撤廃に反対していたことがわかります。これがつい3年前の出来事であるということはいかに女性差別が根強く、それも聖書を根拠にして女性の教会の行ける役割と権威が制限されてきたかを物語っています。

アメリカにおける女性接手の否定はRCAに限ったことではありません。より保守的な教派では議論にもならないケースとも言えます。それに比べて、日本では1933年12月にすでに高橋久野が日本基督教会の東京中会において接手を受けて牧師に任職されています¹³。これは驚くべきことではないでしょうか？キリスト教の歴史の浅い日本においてこれほど女性接手が早かったのはなぜでしょう。理由の一つはやはり女性宣教師たちの働きが影響したと考えるのは早計でしょうか。

「キリスト教女子教育」の目的

しかし私は、必ずしも女性が男性と同じようにリーダーシップを取れるようになったことをキダー女史をはじめとする女性宣教師の最大の貢献としているわけではありません。多くの教育機関で、教育の目的として「リーダーを作る、育てる」という言葉があげられます。もちろんリーダーシップの賜物・特技を持って他者や社会を益する人は大いに必要です。けれども団体はリーダーだけではなくそれに従う人たちもいるのですからフォロワーシップも重要です。しかしどちらも、ある一定の団体の中での特定の場面での役割であり、それらを身につけるといえるのはスキルであり、人格形成とか生き方・哲学という

12 *The Role and Authority of Women in Ministry* p. 6 “Sometimes they went alone, such as pioneer missionaries Ida Scudder and Mary Kidder, with special training as doctors, nurses, and teachers.”

13 山本菊子、前掲書、p. 15

ものではありません。

キリスト教教育は、この世の力、この世のリーダーを超えた本当の権威である神を知ることを目的とします。神を知ることによって私たちは「スチュワードシップ」を知っていくのです。スチュワードシップとは、すべてをはなはだよしとして創造し支配されている神が唯一のリーダーでありマスター・主人であると知り、その主が愛の秩序の世界を取り戻そうとしておられるのに仕えるスチュワードたることです。スチュワードシップは神に仕えそして神が愛するゆえに隣人に仕えることですが、奴隷のようにかしづくことではありません。この世界をそして私たちの生きる社会を神から委託されたと考え、その管理者、つまり執事や国の宰相などのように委託されたものをしっかりと預かり大事に有効に使う責任者たることです。

冒頭でルカによる福音書を通して、当時の女性が社会的立場において貶められていたにもかかわらず、逆にその小ささによって神をより愛し主イエスに精一杯の奉仕をしたこと、そしてそこからさらに主によってより大きく用いられたことを覚えました。ここで見られる「女性性」、つまり女性であることの特色とは何でしょうか。それは小さくされているが故に、自分の至らなさや弱さを自覚せざるを得ないことによって得られる祝福ではないでしょうか。

なぜなら女性だけでなく実は人は皆、いくら学問を積み能力を高めても、また人を支配する権威を得ても、生き物である限り衰え死に至るという限界があります。それ以前に、自分を評価する社会そのものが当てになりません。相対的なものを対象にして自分の価値を確認するために競い合っても空しいのです。しかし人はなまじ自分に誇る力があるとそのことになかなか気づかない。気づくことが出来るのはむしろ、この社会的には小さくされた者、力の無いことを思い知っている者ではないでしょうか。

私たち有限の存在である人間は、絶対者である神の前では皆等しく不完全であり、また神の義をまっとうできない罪人です。しかしその事実絶望することなく、イエス・キリストの十字架による贖罪のゆえに自分は神に赦され、至らないまま欠けの多いままで清めて用いられると素直に信頼することが出来る、そのこと自体が幸いなのです。弱者肯定、抑圧された存在であれということではありません。逆に、あらゆる人間的な基準が傷つけ貶めることの出来ない、神に与えられた自己の尊厳を、イエス・キリストから得られるチャンスがより多いのが世にあって弱く小さくされている者であり得るということです。

〈キリスト教〉かつ〈女子教育〉の意義は、ここにあるのではないのでしょうか。この世の常識と思われる「力」による支配構造に対するアンチテーゼの発信です。それは力の無い者が力を持つ者に向かって声を上げるというのとは違います。そうではなく、世の言う「力」は脆いということを知っていくことが教養であり真の強さだからです。

なぜならば、それがキリスト教教育の大事なところですが、イエス・キリストという神のご自身が、全能の神の権威と力を持ちながら、この世的には最も低い者としてこの世に柔らかない体を持って無力な幼子としてお生まれになったからです。そして行く末はどうか。神の子として持っておられる奇跡の力をご自分の利益のために使うことなく惜しみなく他者に与え、また最高の知恵を持ちながらそれを人々の救いのために用いて教え、しかしそれが理解されず、最後はご自分を慕ったはずの人々にも裏切られ、世の権力や傲慢さによって鞭打たれ侮辱と暴力と虐待の果てに苦しみの十字架を負って死んだからで

す。弱く力無い者が味わされる悲しみと、人の愚かさと自己中心による罪をすべて負ってくださり、それによって最高の愛を示してくださったからです。罪の無い神の子がそれをなされた。すなわち神は、それを「光の道」最も尊い愛の道となされたからです。

その証拠として神は、この世の力が神の愛の力を凌駕することは出来ないと証明してくださいました。罪の暴虐による死からキリストを復活させられたことにより、罪は愛の前に無力となりました。これが本当の勝利です。

キリスト教教育のロールモデルはこのイエス・キリストです。キリストの生き様に従うことを教えるのがキリスト教教育です。世の力のむなしさととらわれず、この世を暗くする人の心の罪に打ち勝つには、同じ空しい「力」で対抗するのではなく、自らの罪に気づき悔い改めて神の愛を知るものとなさせていただくこと。それが本当の成長、魂の成長です。一人一人が変わっていき、そこから共に神の国すなわち愛の社会を実現していくことを目指しているのです。

一人の女性宣教師が極東の地に降り立った、その使命すなわちミッションは何だったのか。母国アメリカで用いられなかった宣教の働きを、異国日本であるからこそ存分に発揮できる時に言葉も背景も違う日本の若い女性たちに最も伝えなかったのは何か。それは主イエスの愛に生かされて与えられたスチュワードシップへの「召命感」だったのではないのでしょうか。

すなわち、若い女性が自分の夢を持つことから始まり、それが成長して自分のやりがいや生き甲斐が人のためになる、与えられた使命だと気づくようになります。周りの役に立ちたい、For Others、他者のために用いられたい。しかし他者とは誰なのか。単に困っている人、気の毒な人なのか。その時々で要求が変わる周囲の人たちに振り回されることなく、ぶれない他者である神をみつめていく。それによって周囲の他者への本当の思いやりが生まれる、周囲の他者の本当の求めに応えられるようになっていくのです。キダー女史の願いは、私たちが人間の思いやり力を超えた主人にスチュワードたるべく召されていることに気づくことだったのではないのでしょうか。

私自身に起きたことをお話しします。ちょうどRCAから宣教師として夫と共に任命された1995年、日本での生活と活動を支える献金集めの仕事が始まりました。日本は物価が高いため集める額も多く、私たちは100以上の教会を訪問していました。その中のあるイリノイ州の教会から、長年支えてきた先輩宣教師がリタイアするため献金を私たちにスライドさせてくださると申し出がありました。ところが、私が神学校を卒業して牧師接手を受けたとたん、その約束をキャンセルしてきたのです。事情を聞きに教会を訪ねると牧師が答えて言いました。「あなたには悪いが、私も教会も女性接手は反対している。聖書は女性のリーダーシップを認めていないからです」。そこで私は答えました。「あなたにとって牧師とはリーダーシップ、権威や尊敬の象徴なのかもしれません。しかし私が牧師になるのは日本でよりよく神と人に仕えるためなのです」。けれどもその牧師は重ねて「とにかくあなたは牧師に相応しくないのです」と言いました。それを聞いて私が思わず発した言葉は「おっしゃるとおりです」でした。「なぜなら私も自分が相応しい人材ではないと思う。それにもかかわらず接手を受けることになった。これは私が望んだチョイスではないのです。あなたのチョイスでもない。と言うことは、これは神の選びしかないでしょう。あなたはそれを否定するのですか」。

こんな言葉は考えて出てきたものではありません。自然に、私のようなものが牧師になるのは神の憐れ

みとご計画によって私を使ってくださいのだなと思えたのです。クリスチャンホームではなく、母だけが教会に通う家庭で自分もほとんど教会に行かない田舎の隠れクリスチャンだった私が、どういうわけかキリスト教倫理学出会い、元RCA宣教師のヘッセリンク博士によって祖父母と妹と共に洗礼を受け、そのつてからウェスタン神学校に留学する道筋がつけられました。しかし現地では圧倒的にオランダ系白人の男子学生ばかりの中に混じって孤独に苦しんでいたのが、その経験により教会という神の家族の大きさに気づかされ信仰の喜びを発見し、同級生から伴侶が与えられました。そして数年後、私はRCAが接手を授けた最初のアジア人女性となったのです。RCAが派遣した初めての女性宣教師だったキダー女史が遠い日本で150年前に始めた宣教の業が、思いもよらなかった形で実っている、私自身その証としてお話をしているのです。

私たちにとって、フェリス女学院は神に委託された事業です。だから150周年を祝うのです。神様、これまでの年月私どもが丁寧時に大胆にあくまで誠実にフェリス女学院においてよきスチュワードであったでしょうか？と150年を振り返ろうとしています。そして将来に向けて導きを尋ね求めます。

フェリス女学院で学ぶ生徒学生たちが、フェリスで受けた教育を通して何を学んでほしいと願うか。神に自分が愛されていると知り、自分の命、自分自身をまず神から託されたものとして大事にすること。それぞれに神から与えられた自分の賜物・個性を発見し、その賜物を精一杯生かしてスチュワードシップを発揮できるように。そしてここを巣立つ女性たちが社会に出て、世の力に負けずに周りを変えていける人になるように。フェリス女学院のあり方そのもの、具体的には教育方針や生徒・学生・教職員の交わりが、頑固な心やひねくれた思いやねたみや孤独な魂を慰めやわらげるようなあたたかい光を放つように。そう祈りつつ歩むことが未来に向けてのミッションではないでしょうか。

キダー女史から始まったフェリス女学院のミッションは、神へのスチュワードシップを身につけた女性が社会を変える発信源になることです。そのミッションが受け継がれ、そしていつかすべての人が真のスチュワードシップを身につけた時、パウロの真意である「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです（ガラテヤの信徒への手紙3：28）」がかなうのです。それは男も女も変わらない・同じという意味ではなく、「一つ」だということに重点が置かれています。様々な個性と賜物を持って召された者たちが一致して共に神からの責任を果たす社会、愛と正義のかなう真の平和な世界を実現するのです。

世界の友の祈りと共に

最後に、フェリス女学院が今もRCAと密接なつながりを持ち、祈られていることをお伝えしたいと思います。私はキダー女史と同じ宣教師の立場ですが、今も私が日本で活動するための資金を40の教会が献金で支えています。そのため私たちは3年に一度アメリカに戻り、支援教会を訪問して日本での活動を報告しています。私どもは日本に来て21年になりますが、これらの教会はその間ずっと献金を継続しているだけでなく、中にはその前の宣教師たちから引き続いて数十年にもわたって日本を覚えている教会もあるのです。私のフェリス女学院での理事、評議員としての働きや礼拝、講演などの機会も大事な報告の一つであり、今もなおフェリス女学院はじめミッション・スクールが日本の若者の魂のために教

育を通して尽くしていることを喜び合います。

多くの支援教会はウィスコンシンやアイオワなど農村地帯にあり、教会員は直接に日本という国を知っているわけでもなく特別な愛着があるわけではありません。それでも例えばサウス・ダコタ州の、人口が200人の村の教会が日本のために祈っていて、3年に一度訪問すると、「いつもお名前を出して祈っているからそんなに久しぶりとは思えない」と驚くように言う人もいます。また、ニューヨークなど都会の教会で会員数がかつての1割に激減した教会もあります。それでも支援を続けてくれています。どの教会も決して潤沢な献金資金があるわけではありません。宣教師を支援することで彼ら自身に目に見える見返りもありませんし、この数十年で日本における宣教活動に明らかな成果が挙げたという達成感も得られたとは言えません。しかし、日本人の99%がまだ神の愛とイエス・キリストの導きを知らない魂のミッションフィールドであることを心配し、日本の教会やミッション・スクールを応援してくれています。教会学校では壁に世界地図を貼り、日本のところに印をつけて毎月祈って子どもたちが献金を献げてくれていますし、婦人会も日本を覚えて食事会など催して献金を募ります。そのような実際の活動を通して、今もお私たちは日本にいて祈られているのです¹⁴。

2010年に私たちが訪問した際に、先に挙げたホーランド市の教会が主日礼拝の中で日本の宣教のために祈ってくださったシーンを皆さんと分かち合いたく思います。日本から5人の牧師を招いて一緒に礼拝に出席し、紹介していただいた時のことです（ビーチウッド教会の祈り・映像）¹⁵。この祈りの最後に牧師が声を詰まらせていました。振り向くと涙をぬぐっていたのです。その場にいた約500人の礼拝出席者たちにとっても、宣教師を派遣し世界宣教に参加することで彼ら自身が神の救いの御業の大きさを実感できる喜びを味わえるのです。150年前のパートナーに今なお祈られていることを覚え、For Othersの精神につながれた神の家族として、愛のエールを送り合いつつ未来へ向かっていきましょう。



日本の私たちに向けて手を振るウィスコンシンの教会の皆さん

14 講演では、カメラに向かって手を振っているアメリカ各地の教会の人々の写真を紹介した。

15 Youtube: <https://www.youtube.com/watch?v=XuxTKX57ZqI>



日本で活動された引退宣教師の方々と共に。エリノア・ノルデン先生(前列右から三番目)

(キストおかざき・さゆり)

アメリカ改革派教会 (RCA) 牧師、日本基督教団協力宣教師、
フェリス女学院理事